今考えれば、私はとても大きな勘違いをしていた。無礼を承知で書かせていただくが、これまで私は身勝手にも日本を含む先進国を「優」として、またケニアを含む発展途上国を「劣」として位置づけていた。その恣意的な分別に用いた物差しは GDP、GNP、GNI といった、世界中で広く使われている経済指標。計算によって裏打ちされたこの代表的な指標に則って、私は「先進国＝豊か＝優」、「発展途上国＝貧しい＝劣」という式を当然のように頭の中に立てていた。それ故に研修以前の私は、国際協力とは、先進国の様々な経済的・技術的支援によって発展途上国を先進国に「近づける」ことを目的としたものであると考えていた。私は国際協力を、途上国に対する「先進国側への引き上げ作業」として考えていた。この場を借りて発展途上国の方々にお詫びしたい。皆さん、ごめんなさい。

自らの勘違いを私に気づかせたのは、ジャッショ村におけるホームステイ先のお父さん（ダンさん）が笑顔で私に訊ねた、シンプルな問いだった。

“ Japan or Kenya, which do you think is better?”

その質問に対し、私は大して考えもせずにただ ”I think both of them are good” とだけ答えた。正直それは、率直な感想というよりもただただ相手の気分を害したくないという思いから口をついた言葉だった。言ってみれば、お世辞だった。私の返答を聞いたダンさんは”OK”と言って微笑み、それを見て私もホッと胸を撫で下ろしたが、その後も彼が私に訊ねたその問いが胸のどこかに引っ掛かっていた。

ホームステイ先のお宅に、電気は無かった。日が没するとランプに火を灯し、それと小さな石窯から漏れる火の光とが数少ない明るみを作っていた。食事、睡眠など用途によって使い分けられた小屋はどれも木造で、夜には外からの冷たい風が室内へと自由に侵入していた。風呂場・トイレは木の薄板で粗雑に囲まれただけの「外」である上、風呂場には無論シャワーなどなく、またトイレはただの「深い穴」でしかなかった。ひねれば浄水が出てくる蛇口、つまり水道もなく、雨水を貯水して飲料水等に用いていた。

例えば電気や水を自由に利用できることを平々凡々たる日常と考えるあまり、それらを必要以上に消費することは決して宜しいことではないと思う。が、「便利である」ことに越したことはない。ランプで照らし出された先しか見えない夜よりは、スイッチ一つで部屋中が明るむ環境の方が便利であることは誰も否めないだろうし、その環境を利用できる状況を前にしてそれを利用しない手はない。高山気候特有の、気温の日較差が大きい環境下で室内へと入り込もうとする外気を遮断出来るに越したことはないし、風呂場にシャワーがあればわざわざタライに貯めた水を手で掬いながら体を洗う必要もない。上水道が整備されていれば、雨水を飲む必要もない。

そう考えるとやはり日本での暮らしはケニアにおけるそれよりもずっと便利であり、楽であり、ケニアを訪れて間もない私には”better”に思えた。それ故に ”I think both of them are good” という返答の裏側に隠した真情は、失礼ながら”I think Japan is better” であった。

しかしながら、農村でのホームステイを始めてから数日が経つ頃になってふと気づいた

ことが、二つほどある。一つには、私達が滞在したジャッショ村の人々は、私が考えていたよりもずっと電気や下水道を必要としていない、ということだ。気温の低い夜にも薪を燃やすことである程度暖を取れるし、ランプさえあれば必要最低限の明かりは得られる。下水道に関しても、簡易なものではあるがトイレは各家庭に設置されており、一応は充足されている。二つ目として、ジャッショ村内での人々の結びつきは非常に強い、ということである。ダンさんと共に道を歩いていると、すれ違う人の九分九厘は彼の知り合いであり、握手をしつつ互いに挨拶を交わしていた。それはダンさんが有名人であるからではなく、「ジャッショ村」というコミュニティーが村落であって、人々が比較的限られた社会集団・生活範囲の中で暮らしているために生まれた環境だろう。日本にある地方の村落でもこのように、一集落の中に大きなコミュニケーションの輪が存在するのかもしれないが、その数は極めて少ないだろうし、そうであるからこそ私の目には、このジャッショ村全体に見られる人間同士の大きな繋がりが新鮮に、そして羨ましく映った。

ジャッショ村に限らず、私たちが訪れたケニアは日本では決して見られない景色ばかりであった。有名なケリオバレーやナクル野生公園はもちろんのこと、どこへ行っても豊富に存在する木や植物、果実や穀物、多くの人々が集う日曜の教会、晴天の下楽しげな音楽が鳴り響く伝統的なウェディング、そして見ず知らずの異国人である私たちを無条件に明るく歓迎してくれるケニアの人々・・・。

常に多様な機械や豊富なインフラによって取り囲まれた環境は人間にとって便利ではあっても、別にそれが途上国より優れているというわけではない。むしろ自然や静寂など、その環境が構築される過程で失われるものも多く、豊かな緑や家畜と共生できる環境は先進国ではほとんど見られない価値ある世界である。日本という先進国と、ケニアという途上国。両者の環境は甚だしく異なるが、それぞれの国の人々にとって自国の環境が「日常」なのであって、それらの「日常」に優劣の順位付けはない。文化相対主義と同様、インフラや情報社会の進展度によって国の優劣が決まるわけでもない。ケニアの環境はひとつのスタイルであって、それと並び日本の環境もひとつのスタイルでしかない。全ては、スタイルの違い。GDP 等の指標は単にその国の経済を示唆する指標であり、その物差しで「日常」を比較することはできない。

そうであるから。途上国の人々が特に不便と感じていない「日常」を、わざわざ先進国が変えるような差し出口をきく必要はない。電線を張ることで便利の幅は増えるかもしれないが、それよりもずっと優先すべき事項がある。上下水道の整備を通した衛生確保や食糧不足の改善、エイズ対策、道の舗装による交通の円滑化など・・・・。特にキベラスラムを訪れたことで、先進国から途上国への国際協力において早急な援助が必要な事項とそうではない事項との区切り、そして国際協力の役割というものをある程度理解することが出来た。国際協力とは途上国に対する「先進国側への引き上げ作業」などではなく、生命を脅かすほど深刻な問題により苦しんでいる途上国に対し、先進国が手持ちの技術を通してその対処を「お手伝いさせていただく」ことである。決して、途上国の人々の「日常」

を変えようとするのではない。彼らが自分達の「日常」を安心して送れるよう支えることこそが、国際協力の役割だろう。

　最後に。ダンさん、あの時はつい嘘をついてしまいましたが、今は心からそう感じるので、今更ながら改めて答えさせてください。

”I think both of Kenya and Japan are good”

ケニアと日本、どちらも良いですよ。